

目次

はじめに	1
① ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアム(宮城教育大学)	2
② 岩手県平泉町教育委員会	4
③ 宮城県気仙沼市教育委員会	6
④ 大崎市世界農業遺産推進課	8
⑤ 福島県只見町教育委員会	10
⑥ 秋田県大仙市教育委員会	12
⑦ 宮城県立気仙沼高校	14
⑧ FEEL Sendai	16
⑨ 仙台ユネスコ協会	18
⑩ 東北学院中学校・高等学校	20
⑪ 福島県立安達高等学校	22
⑫ 会津ユネスコ協会	24
⑬ 宮城県多賀城高等学校	26
おわりに	28



ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアムで取り組むESD/SDGs

はじめに

日本では、新学習指導要領で、「持続可能な社会の創り手」を育むことを、これからの教育の方向を示しました。

しかし、「持続可能な社会」とはどんな社会なのでしょうか？

2005年からはじまった「持続可能な開発のための教育の10年」でも様々な議論がさかんに行われてきました。ESDで育む力については整理されてきましたが、「持続可能な社会」のイメージとなると漠然として、十分理解されてきませんでした。2015年に、国連が2030年までに世界で取り組む、持続可能な社会を創るために解決する目標(課題)、SDGsを定めて、ようやく「持続可能な社会」のイメージがわかりやすくなりました。

SDGsで提起された17の目標、169のターゲットは、持続可能な社会を実現するために当面解決しなければならない課題です。しかし、これらの課題は、1度に解決できるものではありません。それぞれの地域社会や主体が、それぞれの状況に応じて、課題を設定して取り組んでいくものです。また、SDGsは、これらの目標(課題)を解決していくと同時に、解決する人材の育成であるESDを行っています。まさにSDGsはESDなのです。

ESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアムでは、東北地方の各地域からESD/SDGsの実践のカリキュラム・プログラムを発信する取り組みを行っています。このパンフは、現在の各地域のESD/SDGs実践の特徴を紹介したものです。具体的なカリキュラム・プログラムは別途報告書を作成しました。



ESD/ ユネスコスクール・東北コンソーシアム

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149
TEL:022-214-3708 FAX:022-214-3342
E-mail:kenkyo@adm.miyakyo-u.ac.jp



ESD/SDGs を実践する東北地方の 活動拠点のネットワーク



2014年度から2016年度にかけて行ってきた文部科学省ユネスコ活動費補助金事業によるESD/ ユネスコスクール・東北コンソーシアムの取り組みとその継承により、東北地方のコンソーシアムが整備されました。また、2018年度からのユネスコ活動費補助金の事業「東北地方のSDGs達成に向けた学校と地域の協働によるESDの推進」によって、東北地方ESD活動支援センターと連携しながら、東北地方にユネスコスクールを軸にしたESDの活動の枠組みが強化され、ESDの拠点地域が成立してきました。とくに、気仙沼市や大崎市、只見町、平泉町ではコンソーシアム活動による地域拠点力と地域を組織するネットワーク力が生まれ、これらの地域では、学校教育を中心として、ESDを推進するユネスコスクールの学びあいが始まっています。

2019年度は、「地球市民による地域資源を活用したSDGs・ESDカリキュラム開発」をテーマに、4回の学びあいセミナーを通じてこれらの重点地域では、授業カリキュラム作りや地域づくりプログラム作りを行い、その成果を可視化しました。他のサテライト地域では、重点地域の成果を学びあい、東北地方に10地域のESD・SDGs拠点地域を整備する実践に取り組んできました。

コンソーシアムのESD/SDGsカリキュラムとプログラム

平泉町は、世界文化遺産を持続可能に維持発展させる『平泉学』を学校、社会教育、地域づくりの中で実践しています。幼稚園～小学校～中学校での『平泉学』のカリキュラムは、授業の中で、課外活動の中で、さらに学芸会などの成果発表を通じて、実践されています。こうした成果を町では、町の『広報』にわかりやすく特集を組んで地域づくりのためのプログラムを提起しました。

気仙沼市では、市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校のほとんどがユネスコスクールに加盟して、地域社会と連携しながらESD/SDGsのカリキュラム開発を行い、防災教育や海洋教育などに成果をあげてきました。地域づくりのプログラムについては、気仙沼のESD円卓会議方式を18年続け、学校と地域が連携するシステムを作ってきました。

大崎地域では、世界農業遺産「持続可能な水田農業を支える『大崎耕土』の伝統的水管理システム」の登録を受けて、ESD/SDGsの推進のため地域プログラムづくりを中心に取り組んでいます。

只見町では、ユネスコ・エコパークを中心テーマにした『只見学』が小中学校で取り組まれ、海洋教育の視点を入れた山と川と海のつながりを理解するカリキュラムを作り、「只見愛」を持った人材の育成が行われています。

他の地域でも、それぞれの地域課題にあったSDGsの目標を設定して、持続可能な社会を実現する人材育成（ESD）を行っています。

運営委員会（●印サテライト地域）

- 宮城教育大学
- 白神地域 白神山地財団
- 平泉地域 岩手県平泉町教育委員会
- 大仙地域 秋田県大仙市教育委員会
- 気仙沼地域 気仙沼ESD/RCE推進委員会・気仙沼市教育委員会
- 大崎地域 大崎市教育委員会・大崎市世界農業遺産推進課
- 仙台地域 FEEL Sendai
公益社団法人仙台ユネスコ協会
仙台市八木山動物公園
NPO 法人環境会議所東北
宮城県多賀城高等学校
東北学院中学校・高等学校
仙台市立郡山中学校
富谷福祉会
- 白石地域 白石ユネスコ協会
- 安達地域 福島県立安達高等学校
- 会津地域 只見町教育委員会
会津ユネスコ協会
- ・仙台広域圏ESD・RCE運営委員会
- ・国連大学サステイナビリティ高等研究所
- ・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
- ・公益社団法人日本ユネスコ協会連盟
- ・東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター
- ・アクサ生命保険株式会社
- ・ユニグループ・ホールディングス株式会社

■オブザーバー

- ・仙台市環境共生課・東北地方環境事務所・東北地方ESD活動支援センター
- ・宮城ESD研究会

平泉町教育委員会

〒029-4192 平泉町平泉字志羅山45-2
<https://www.town.hiraizumi.iwate.jp/>



過去に学び、今を見つめ、未来を考える 「全世代型平泉学」

世界文化遺産の町平泉では現世浄土のまちづくりを進めた先人の思いや歴史を学び、伝統文化などの地域の宝を受け継ぎ、すべての町民が学ぶ「全世代型平泉学」を進めています。その取り組みを発展させ平泉の価値と魅力を国内外に発信しながら持続可能な平泉の実現を目指しています。



毛越寺あやめ園をお散歩する園児たち

参加体験⇒知識行動⇒発信行動のプロセスで学ぶ

● お散歩からガイド体験学習へ (幼保小中の系統だてた平泉学学習)

平泉の子どもたちは、町内の世界遺産・地域遺産・伝統文化から地域の人々の暮らしなどを通して地域を誇りに思う系統的な「平泉学」を学んでいます。その学習サイクルは、参加体験（見聞きし行事へ参加したりすること）、知識思考（資料から平泉をとらえ、話し合い、知識を深めること）、発信行動（町外の方々に平泉を発信すること）の学習をサイクル的に進めています。

幼稚園・保育所の子どもたちは街歩きのみで身近な自然に触れ、謡の練習を通して平泉ならではの文化を感じています。小学校では、町の自慢や地域の祭り、産業と環境を調べ、その成果を町民の前で発表したりパンフレットにまとめたりしています。

中学生の平泉学学習では、最終目標を3年生としてのガイド体験に向けて、1年次の写経・座禅・発掘体験や平泉学検定への挑戦、2年次の防災学習、大文字火床づくり、3年次の修学旅行での平泉アピールなどに取り組んでいます。



自分たちが育てた特産品「黄金メロン」を販売する小学生



毛越寺、観自在王院跡を訪れた観光客を英語でガイドする中学生

世代間交流を図り、地域の宝を学ぶ行政区での平泉学

● 世代を結ぶ地域学習

平泉学を子どもたちだけでなく、地域ぐるみの学習へと拡大させるため「地域学習」の取り組みも行われています。町内21行政区それぞれの子ども会が主体となり、地域遺産であり史跡や伝統行事・風習、郷土芸能、郷土料理などをテーマとして学んでいます。子どもたちを中心に地域住民が集まる絶好の機会となっています。子どもたちが地域の宝に興味をもち、祖父母世代から地域の歴史や文化を教わる、それは子どもだけでなく、大人もふるさとの良さを再認識する機会になっています。

郷土への愛着と誇りを次世代に伝える地域学習をきっかけに、世代間交流が活発になり、地域コミュニティの再生につなげたい、地域を知り、地域を語れる子どもたちを増やしたいと願って取り組んでいます。



18区の老人クラブと子ども会による「郷土料理」昼食交流会の様子

平泉を伝える情報発信学習

● 黄金平泉情報発信プロジェクト

平泉ゆかりの地や全国の世界遺産地域を訪れ、平泉とのつながり確かめ、訪問先での児童交流を通じて、見聞を広め、友好を深め、平泉の価値・魅力を積極的に発信することをねらいとして、2013年から「ジュニア平泉文化歴訪団」を組織して活動しています。

当初は、東北地方限定としていましたが、2018年からは「黄金平泉情報発信プロジェクト」として、訪問地を全国へ広げ、2018年には、弁慶終焉の地から生誕の地和歌山県田辺市を訪れ、本宮地区小学校の子供語り部の案内で熊野古道を歩き、互いに発信しあうことができました。また、2019年には、平清盛建立の広島県安芸の宮島を訪れ、宮島学園の児童に島内をガイドしていただき、発信交流を深めました。平和記念公園での貴重な平和学習もかけがえのない学びとなりました。今後も、「平泉を出て、平泉を考える」情報発信学習を継続していきたいと思っています。



和歌山県田辺市を訪問し、本宮地区の小学生からガイドを受ける平泉町の小学生

● 全世代型平泉学の深化に向けて

幼保小中の平泉学から地域学習としての平泉学へと広がりを見せてきたのですが、その継続を考えるだけでなく、先人の平和への願いを受け、今を見つめ、町の将来のあり方を考えるための課題解決型学習へと発展させていくことが、平泉が目指す「千年のまちづくり」にとっては欠かせない全世代型平泉学なのです。

気仙沼市教育委員会

〒988-8502 気仙沼市魚市場前1-1

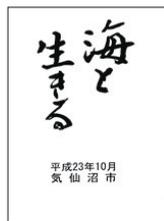


気仙沼 ESD が目指す「他者と共により良い未来を創造し、自分らしく幸せに生きるための教育」

気仙沼 ESD は、2002年の面瀬小学校の取り組みをスタートとし、地域の課題に向き合い、その課題を解決するために何が必要かを考える学習をととして、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成に取り組んできました。

学習指導要領にも ESD の理念が反映され、今後一層 ESD の重要性が高まっているなかで、気仙沼市は ESD として、「他者*と共により良い未来を創造し、自分らしく幸せに生きるための教育」を進めています。気仙沼 ESD は、環境教育とか防災教育とか地域伝統文化教育とかの、特定の領域の教育を指すものではなく、このような「価値」に重きを置く教育全てを指しています。

*「他者」とは、「周囲・地域の人」であり、「現在の地球上の人」であり、「未来の人」です。



震災復興計画のキャッチフレーズ



地域に根ざした実践と多様な連携

市内では、各地域の特色を生かした多様なカリキュラムが開発され、地域に応じて変化を遂げながら体系的・探究的な取り組みが実践されています。また、市内の関係者はもとより、大学や専門機関を含めて、多様な関係者との協力・連携のもとに展開されていることも大きな特徴です。

情報共有や連携強化のために、ユネスコスクール研修会のほか、年に1回多様な関係者が一堂に会する気仙沼 ESD/RCE 円卓会議を開催し、最新の情報を共有しながら、あるべき姿を共に考えています。



2019気仙沼 ESD/RCE 円卓会議

東日本大震災の教訓を踏まえた気仙沼 ESD における防災教育

気仙沼市は、東北地方太平洋沖地震・津波により多数の尊い命が犠牲になりました。このことを教訓とし、ESD の視点に立って防災教育の見直しを図りました。「防災学習シート」には、そのことを踏まえた指導の具体例が詳しく記載され、指導に即応できる学習プログラムが提供されています。

防災教育を ESD の柱に据えている階上中学校では、震災の教訓を次の世代に語り継ぎ、命を守る行動ができる未来人を育成するために、気仙沼震災遺構伝承館での語り部活動を始めました。



階上中学校生徒による語り部

「海と生きる」気仙沼に関わるカリキュラム

気仙沼市の震災復興計画のキャッチフレーズは「海と生きる」です。これまでも、これからも気仙沼市は海の恵みを生かすとともに、その厳しさを受け入れていきます。このことを踏まえて、気仙沼市では、海に関する学びを再構築し、海洋教育としてのカリキュラムの構築にも力を入れています。市内15の幼稚園・小学校・中学校で海洋教育推進連絡会を組織し、情報を共有し、大学や専門機関の指導・助言と協力をいただきながら実践をすすめています。



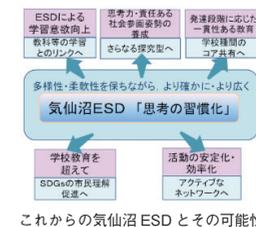
体験を遊びに生かしている幼稚園児

また、気仙沼市は、「海洋プラスチックゴミ対策アクションプラン」を策定するなど、海洋環境保護に対して先進的な取り組みを始めました。気仙沼 ESD の中でも、この問題に関する学びを進め、市内の教職員や行政職員を対象とした研修会・や海岸のクリーン活動などの実践的な活動も行っています。

未来の気仙沼を描き、未来を創造する学びをととした人材育成

●『思考の習慣化』を図る ESD とさらなる深化・発展へ

経済のグローバル化や AI の発達、少子化など急激に変化する社会のなかで、これまでの実績を生かしながら、持続可能な社会づくりについて考えることの価値に触れる体験的で探究的な活動を展開し、未来の社会に生きる「未来人」として必要な教養である「思考の習慣化」を図ることを目指します。活動の安定化とアクティブ化を図りながら、市民参加を一層促進しながら、責任ある社会参画姿勢を身に付けていけるように深化・発展させていきたいと考えます。



●『地域社会を創造する力を養うプロジェクト』も実践しています。

高校で、中学校までの積み上げを土台とし、課題研究が行われています。この学習活動を、市行政や NPO 法人が主催する人材育成事業「ぬま大学」「ぬま塾」へと接続する地域創生を課題としたプロジェクトを展開しています。

大崎地域世界農業遺産推進協議会

〒989-6188 宮城県大崎市古川七日町1番1号
 大崎市産業経済部世界農業遺産推進課
 TEL:0229-23-2281
 E-mail:osaki-giahs@city.osaki.miyagi.jp



「守るために活かす」 世界農業遺産“大崎耕土”を活かした持続可能な地域づくり

世界農業遺産に認定された大崎耕土の農業や文化、豊かな生態系、水田や水路、居久根（いぐね）「屋敷林」が織りなす美しく、機能的な農村景観などを未来に継承・発展させるため、大崎地域世界農業遺産推進協議会と関係団体が一体となって保全と活用施策を推進し、大崎耕土の農業と暮らしを一層誇り高いものにしていきます。



FAO世界農業遺産国際フォーラムにて認定証を授与

フィールドミュージアム構想

大崎耕土の様々な地域資源を博物館の展示物のように巡ったり、体験することなどにより、地域の方々の理解醸成と交流人口の拡大を目指すのが“フィールドミュージアム構想”です。現在、地域資源の見える化に向けて以下の取り組みを実施中です。

- ① フィールドミュージアムマップの作成
- ② 地域ストーリー・散策ルートの作成
- ③ 映像制作
- ④ 案内板の設置
- ⑤ フィールドミュージアム拠点整備
- ⑥ 食・農体験等の受入体制の確立
- ⑦ プロモーションと機運醸成
- ⑧ 居久根の保全・活用



大崎地域上流部の山間水路



居久根や水路が織りなす独特の農村景観

大崎地域の農産物等認証制度

“豊饒の大地「大崎耕土」世界農業遺産ブランド認証制度”は大崎耕土で生産された農産物や工芸品等の付加価値向上を図るものであり、認証制度は、まず米から開始し、2019年産米から世界農業遺産地域の認定米として販売しています。

本認証の特徴は、米の認証については、大崎市にある宮城県古川農業試験場で開発された品種であること、農業化学肥料の使用が慣行比5割削減であること、さらに、生き物のモニタリングを実施することを必須要件としているのが特徴です。これだけの広域で生き物調査を行う認証制度は国内でも初めての取り組みになります。



生き物モニタリングの研修会



認証マーク

世界農業遺産の副読本

世界農業遺産大崎耕土を「守るために活かす」していくために、先人の知恵と努力を次世代に伝え、誇るべき郷土の宝として継承していくための人材育成を行っていくことは不可欠です。このようなことを踏まえ、2020年度から1市4町の小学校3～6年生の全員に“世界農業遺産副読本”を配布し、学校教育の中で大崎の魅力を学ぶ機会を設け、地域への理解を深める取り組みを進めていくこととしています。

副読本の作成は、1市4町の教育委員会の参画の下で編集会議を構成し、地域事情にも精通した各教育委員会の教員が執筆作業を行いました。

このような学校での副読本を用いた学習をきっかけに、地域の方々や大崎地域の魅力を共有し、世界農業遺産認定地域に暮らすことへの誇りを醸成していきたいと考えています。



世界農業遺産副読本（案）

只見町教育委員会

〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下2591-30
TEL: 0241-82-5320
E-mail: gakkou@town.tadami.lg.jp
http://kir523528.kir.jp/



ユネスコエコパークを軸にした 持続可能な交流人口づくり

只見町は、福島県の南西部に位置し新潟県と接しており、町の総面積747km²の約94%が山林で占められている中山間地域です。人口は、現在4,200人台で、高齢化率も46%に達しています。

只見町は、平成26年にユネスコエコパークに認定されました。ユネスコエコパークの理念である「人間と自然の共生」を推進しながら、持続可能な発展のできるまちづくりを目指しています。



只見町の位置

「只見学」のユネスコスクール実践カリキュラム

只見町にある3つの小学校と1つの中学校は、ユネスコスクールとして、地域理解学習である「只見学」を核としたESDに取り組んでいます。世界の平和を守る人材育成の土台として、ESDの実践を通して故郷を誇りに思い、故郷の豊かな存続に寄与することのできる児童・生徒の育成を目指しています。

また、平成29年から東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センターと提携し、海洋教育の視点を付加したESDを実践しています。地球規模の水の循環という広く大きな視点で只見を考え、「故郷を愛することは海や地球を守る」という意識を児童・生徒に育むことをねらいとしています。

さらに、子どもも大人も地域への理解を深め、地域の価値を再発見することができるよう『只見おもしろ学ガイドブック』を刊行し、全戸配付しました。平成27年からは、『只見おもしろ学ガイドブック』の一層の浸透を図るため、「只見おもしろ学検定」を実施しています。

各小中学校の主な学習活動は、只見小「ふるさと登山」、朝日小「海洋交流学习」、明和小「伝統芸能の伝承学習」、只見中「地域合同防災訓練」などです。



田子倉湖の大雪の秘密を探ろう
(明和小5年生)



「只見おもしろ学ガイドブック」

エコパークを活用した交流人口の育成プログラム

少子高齢化が進行し、只見町の小中学生の減少とともに、只見町唯一の高校である只見高校への入学者も減少してきました。このようなことから、只見町は只見高校の存続のために、平成14年から「山村教育留学制度」を始めました。県内外から只見高校への入学者を募集することで、入学生の安定的確保を目指しました。留学生は男子寮、女子寮に分かれて生活しています。山村教育留学生によって只見高校の存続と活性化、そして只見町の交流人口の拡大につながることが期待されています。



(左) 山村教育留学生の生徒たちが、12月24日クリスマスの夜、只見保育園の幼児の家庭にサンタの衣装を着て、クリスマスプレゼントを子供たちに届ける、町の催しに参加した。
(右) 9月15日(日)、只見町内の只見、朝日、明和の3地区それぞれで運動会が開催され、山村教育留学生も只見地区の運動会に、「高校生」チームとして参加し、熱戦を繰り広げ3位入賞を果たした。



3小学校が各地域のつる細工保存会の方々に教えていただき、只見の伝統技術を学び地域の文化祭等で発信している。
(写真は明和小6年生)

地域の資源を活用した持続可能な地域づくりプログラム

● 地域産業づくり～合同会社「ねっか」の設立

合同会社ねっかは平成28年7月、只見町の米農家5軒で設立され、米焼酎「ねっか」を製造・販売しています。「ねっか」は、「私たちの故郷がいつまでも故郷であり続けますように」という深い祈りを込めながら、全量が只見の米でつくられており、自称“日本一小さな蒸留所”から生まれた米焼酎です。

合同会社ねっかは、地産地消、地域貢献、将来への継承のための活動にも取り組み、田植え・稲刈り体験を実施したり、ゲストティーチャーとして地元の小学校の授業に参加したりしています。



米焼酎「ねっか」
(合同会社ねっか HP より転載)

● ブナと生きる 雪と暮らす 「自然首都只見」伝承産品

「自然首都・只見」伝承産品は、この地域の自然環境、生物多様性の保護・保全とそれらを拠り所とした地域の伝統産業や文化の継承・発展、地場産業の育成のために町が認定する制度です。

只見の雪深い大自然の恵みを受けた天然資源や農産物を原材料とし、伝統的な技術でつくられてきた、つる細工や農産物加工品等が厳正な審査を経て「自然首都・只見」伝承産品として認定・販売されています。



伝承産品を紹介しているパンフレット
(只見町役場 地域創生課)

大仙市教育委員会

〒014-8601 秋田県大仙市大曲上栄町2-16
 TEL:0187-63-1111(代)
<http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ky-iinkai/>



大仙市は秋田県の南部に位置し、人口約80,000人、面積約867km²のどかな田園都市である。小学校21校、中学校11校を擁し、教育目標を「生きる力を育み、社会を支える創造力あふれる人づくり〜共(ともに)創(つくる)考(かんがえる)開(ひらく)〜」としている。大仙市は秋田県の中でも学力が高く、全国からの教育視察も多いが、地域と連携した様々な活動が学力の支えとなっていることを知り、視察者は一様に納得する。

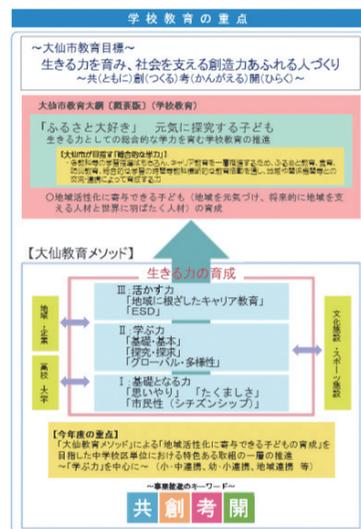
今年度、学力向上フォーラムを開催し、全国から約1,000人の参加者が訪れた。授業では、フードロスを取り上げた英語の授業や、貧困や少子高齢化問題を取り上げた社会科の授業、地域の農業振興を取り上げた技術・家庭科の授業など、SDGsの視点での授業も多く公開された。実践発表では、小・中・地域の連携による「地域版SDGs」の実践についての報告が行われた。本フォーラムでは、「秋田の探究型学習」を実践することで、教科等の学習がESDの視点に立って展開できること、そしてそれが学力向上につながることを示し、多くの参観者から賛同を得た。

次に、大仙市としての取り組みを紹介する。

「大仙教育メソッド」の展開

平成28年度から「大仙教育メソッド」に取り組んでいる。これは、11ある中学校区で、園・小・中及び地域と連携を図り、「I 基礎となる力」「II 学ぶ力」「III 活かす力」の3つを高める特色ある教育活動を展開するものである。その最上位目標である「III 活かす力」にESDを位置付け、SDGsの目標4である「質の高い教育をみんなに」を、地域等とパートナーシップを組むことで実現し、「地域の活性化に寄与できる子どもの育成」を目指している。さらにこの取り組みは、新学習指導要領の理念である持続可能な社会の創り手の育成を目指すものでもある。

特色ある、中学校区の主な取り組みとしては、地域の伝統文化の継承活動、ESDの視点に立った教科横断的なカリキュラムの工夫、心のバリアフリー学習の充実、森林環境学習、被災地との交流活動、国際教養大学との交流活動、ふるさとキャリア教育の充実など、SDGsにつながっている。



大仙市中学生議会

本市では、3年に1回「大仙市中学生議会」を開催している。これは、未来を担う中学生が、まちづくりや教育行政などの生徒に身近なテーマについて一般質問形式で質問・提案を行い、市行政及び市議会への興味と理解を深めるとともに、その体験を実際の学校生活や地域行事などで役立てていくことにより、総合的な学力の育成を目指すものである。中学生から出された意見が、実際の政策として取り上げられることもあり、市の将来を考え、自分たちができることに積極的に取り組む「人づくり」に効果的である。当日は中学生サミットのテーマである「大仙市の未来は私たちがつくる」の下、持続可能な未来への提言が次々と出された。「郷土料理や体験活動を取り入れた文化財の有効利用と世界への発信」「大仙市の特産品を生かした地域活性化について」「食品ロスへの取り組みについて」「喜びや安心を感じられる子育て支援について」「防災対策・避難所について」など、SDGsの目標に沿った質問や提言が出され、市当局職員が丁寧に答弁した。その様子はYouTubeで配信された。

<https://www.youtube.com/watch?v=aV6JYy5ZB4s>



中学生サミットのポスター



中学生議会の様子

大仙ふるさと博士育成事業

地域行事への参加や、企業・施設等での見学・体験など、地域と関わる活動を通じて、ふるさとを愛する心を育て、地域の将来を担う人材の育成を目指すのが、大仙ふるさと博士育成事業である。活動内容によってポイントが与えられ、その合計によって、初級、中級、上級、名誉博士等の大仙ふるさと博士に認定され昇級する仕組みになっている。現在初級が4,185人、中級1,728人、上級308人、名誉博士52人となっている。参加した児童生徒からは「お酒を造る大変さがよく分かりました。微生物の力を借りてお酒を造っていることがすごかったです。」(酒造店)「海外にも出荷すると聞いて、驚きました。」(農業法人)、同行した保護者からも「近くに世界に発信している工場があることを知りました。よい企業だなと思いました。親としては就職先としてもすごく気になります。」(機械製造工場)等の感想が寄せられた。地域を様々な視点で捉え、地域の課題を解決するまさに地域版SDGsである。



ふるさと博士に授与されるバッジ



工場見学の様子

野菜収穫体験

宮城県気仙沼高等学校

〒988-0051 宮城県気仙沼市常楽130
TEL:0226-24-3400
E-mail: kesenuma-h@od.myswan.ed.jp
https://kesenuma-h.myswan.ed.jp/



グローバルな視点を持って地域社会の創造に貢献する 志と実践力を兼ね備えた人材の育成

宮城県気仙沼高等学校は、昭和2年に県内9番目の旧制中学校として開校した旧気仙沼高校と、大正12年に町立実科女学校として開校した旧鼎が浦高校が、平成17年4月に再編統合され、さらに平成30年度には気仙沼西高校との統合を経て開校した学校です。3つの学校の90年以上に及ぶ良き伝統を継承し、活力ある教育活動や先進的な取り組みを展開して、地域の期待にこたえられる学校づくりを進めています。大学進学を中心とした多様な進路の達成に向けた学習指導や部活動の奨励を行っています。また、国際交流・地域文化交流に積極的に取り組み、英語教育の充実を図りました（平成18年度英語教育優秀校として文部科学大臣より表彰）。平成20年度にはユネスコスクールに認定され、「気仙沼 ESD」の最終段階となることを意識した活動を展開し、平成30年に第9回 ESD 大賞において文部科学大臣賞を、令和元年には第1回ユネスコスクール北海道・東北大会において実践大賞を受賞しています。震災後は、支援事業を契機として他県の高校や各種団体との交流活動を積極的にを行い、平成28年度より文部科学省のスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、海を素材とする「グローバル・リテラシー」の育成を目指しています。



地域と連携した学びの最終段階を意識した探究型学習

学校設定科目「地域社会研究（1年）」「課題研究Ⅰ・Ⅱ（2・3年生創造類型）」を中心とした探究型学習では、SDGsと研究の必要性・実効性・主体性を意識させ、地域課題研究から世界課題研究へと発展させ、実感のある研究を進めながら「グローバル・リテラシー」（本校が目指す資質・能力のことで「基礎的な知識・技能」「思考力」「コミュニケーション力」「多様性・協働性・行動力」を総称してこう呼んでいます）の育成を目指しています。

「地域社会研究」では、1年生全員が年間を通して、5領域（「海と産業」「海と人間」「海の文化」「三陸の自然」「海と防災」）24分野から選択した地域課題の解決策を研究します。「課題研究Ⅰ」は「地域社会研究」の深化・発展として、SDGsと関連したテーマを設定し、個人研究を行います。研究成果は年2回（10～11月、1月）の発表会で披露するほか、県内外の高校や団体が主催するイベント等にも積極的に参加しています。



全体発表会でのポスターセッション



年2回フィールドワークを実施しています

グローバルな視点を持って課題解決を考えるための国際理解学習

市内には技能実習生や結婚後に移住した多くの外国人が住んでおり、これまで各種の交流活動を行ってきましたが、今年度も市内外国人による国際理解セミナーや防災フォーラム、技能実習生との交流会を実施しました。また、9月には「世界津波の日2019高校生サミット in 北海道」に3年生3名が参加し、世界44カ国の高校生と津波の脅威と対策について学びました。



津波サミットでの真剣な話し合い

また、2年生創造類型の台湾研修を今年度より生徒全員参加として、12月1日～5日の4泊5日で実施しました。台湾では現地の大学教授や高校生との交流会を行い、英語による研究発表や海外の歴史・文化に触れるフィールドワークの機会を持ちました。この研修では、語学力を高め、異文化理解を通じた視点を増やし、視野を広げることができました。



台湾研修～九份にて～

このほか、本校独自のC-cube活動、海外の大学生との交流会、スカイプ交流、海外研修などの活動を通して、グローバルな視点で考える資質と英語運用能力の育成に取り組んでいます。

学びを行動につなげるための地域と連携した学習

1年生と2年生創造類型のフィールドワークでは県内各大学や市役所・地元の企業・NPO法人等を訪問し、地域の現状や課題を学べる体制を整えています。成果発表会にはフィールドワーク先や市議会議員などを招き、ポスターセッションで議論できる場も設定しています。この他、フィールドワークアドバイザーの委嘱、市や消防署と連携した防災学習、小中学生との生徒間交流などESD活動の成果を実践へと繋げるための体制を整えました。

また、教員の指導力向上を目的とした研修会や授業研究会をアクティブに実施し、探究型学習とリンクする教科指導マネジメントにも取り組んでいます。



リトルティーチャー
(地域の小中学生に対する学習支援)



課題研究指導力向上研修会

FEEL Sendai

(杜の都の市民環境教育学習推進会議)

〒981-8671 宮城県仙台市青葉区二日町6番12号MSビル二日町5階

TEL: 022-214-0007

E-mail: feel_sendai@city.sendai.jp

https://www.tamaki3.jp/



良好な環境を支える 仕組みづくり・ひとづくり

「杜の都の市民環境教育・学習推進会議」(FEEL Sendai) は環境に配慮する人を社会全体で育てていくための組織として平成16年5月に設立されました。

市民・NPO・学校・事業者・行政等のあらゆる主体のパートナーシップを構築し、メンバーによる幅広いネットワークを活用しながら、総合的な環境教育・学習を推進しています。学校教育等での活用を目的に学習指導要領に準拠した環境学習プログラムの開発・提供や、環境問題に取り組む団体の支援、次世代の環境教育学習を担う人材育成などを進め、持続可能な社会づくりに向けた様々な取り組みを行っています。



FEEL Sendai のパンフレット

杜の都仙台の自然・社会環境を生かした環境学習プログラム

杜の都仙台の特色ある自然環境・社会環境を素材に、NPOなどが環境学習プログラムを作成し、学校教育等の現場に展開しています。子どもたちをはじめとした市民にプログラムを体験学習していただくことで、地球規模・地域レベルの環境問題について考え、地球や地域を守るために環境に配慮した行動の取れる人(=杜々かんきょうレスキュー隊員)を育成することを目指しています。

令和元年度は自然や水辺、食・農、暮らし、地球環境などの分野について全26プログラムを揃え、保育所や小学校などで85件実施しました。



「のぞいてみよう！にぎやかな土の世界」
小学校での様子

持続可能な社会の実現に向けた仕組みづくり

将来の世代を含むみんなが安心して暮らすことのできる持続可能な社会を実現するため、環境に配慮した行動を社会に広げ、定着させていけるような企画を市民やNPOなどから募集し、採用した企画を実施しています。これにより、NPO活動の活性化と、市民への環境に配慮した行動の広がりを目指します。

この事業は、市民に向けて広い波及効果が見込まれる企画を募集する「環境の樹」部門と、環境活動を始めようとするグループの『はじめの一步』を支援する「環境の芽」部門があり、年3~4件程度実施しています。



田んぼのミズアオイを観察する
ワークショップの様子

多様な主体とのパートナーシップ

学生・NPO・市民が連携し、多くの市民が気軽に参加して楽しみながらESDや環境問題に理解を深めるためのイベントを毎年開催しています。普段は別々に活動をしている団体が実行委員会としてまとめ、学生主体の事務局が中心となってイベントの企画・運営をするのが特徴です。

令和元年度は「知って得する環境学習～新しい時代！環境をもっと身近に感じよう～」をテーマに令和元年12月7日に開催しました。全21ブースが出展し、来場者は1,400人とたくさんの方にご来場いただきました。各ブースでは環境問題についてのパネル展示やゲーム、小物づくりなど様々な内容を企画し、全体ではシールラリーやSDGsの17のゴール表を受付に掲示するとともに、各ブースにもゴールマークを一つ掲示しSDGsの取り組みをPRしました。



リース作り体験



ブース出展の様子



エコすごろくゲーム

環境教育に携わるひとづくり

環境に関する知識や経験を得ながら、環境活動を実践している人とのつながりを通して、18歳から30歳代の若い世代を環境教育・学習に携わるリーダーとして育成していくことを目的として実施しています。

活動では、講義による学びとNPO団体等の活動体験、これを生かしての環境フォーラムせんだいでの発表という3つのプログラムを通して、環境に関する知識・経験を深めるとともに、受講生同士やNPOとの交流などの「環境に関わる人とのつながりづくり」を支援しています。



宮城教育大学での動物飼育体験



市内中心部での清掃活動



虫の声を楽しむ会で虫観察

公益社団法人 仙台ユネスコ協会

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1-3-9 仙台市役所錦町庁舎3F
 TEL:022-224-2581 FAX:022-302-3406
 E-mail:sendai@unesco.or.jp
 https://www.unesco.or.jp/sendai/



民間ユネスコ運動発祥の地としての自覚と責任をもち、「誰も置き去りにしない」社会作り」を標榜

仙台ユネスコ協会は、1947年7月19日、世界初の民間ユネスコ団体（当時は仙台ユネスコ協力会）として設立されました。日本の UNESCO 加盟（1951）、国連加盟承認（1956）の原動力となったと伝えられています。設立に尽力した外務省の上田康一氏が事務局長に、初代会長には、東北大学総長佐武安太郎氏が就任しました。民間ユネスコ運動の輪は瞬く間に世界中に広がり、今では世界118カ国で5,000を超える協会やクラブが活動しています。仙台ユネスコ協会は、発祥の地としての自覚と責任をもって、これからも先導的役割を果たそうと活動に取り組んでいます。

● 2人のブーツの娘（佐藤忠良 作）

第1回民間ユネスコ世界大会が、1984年、「平和・開発・参加」をテーマに仙台で開催されました。86か国370人の海外からの参加者を迎え、1,500名のユネスコ関係者・一般市民が参加しました。「ブーツの娘」像は、この大会を記念して榴岡公園に建立されたもので、同じ像が UNESCO パリ本部にも寄贈されました。2つの像は向き合った形で設置され、台座に刻まれた UNESCO 憲章の「平和の心」の継承を見守っています。

● 世界平和への貢献とユネスコ精神の継承 「民間ユネスコ運動の日」

仙台ユネスコ協力会創設の7月19日を民間ユネスコ運動の日と制定、全国のユネスコ協会で記念行事が行われます。仙台ユネスコ協会では記念講演を行い、ユネスコ理念の啓発に努めています。2019年度は、福島県只見町教育委員会元教育長齋藤修一氏による「今こそ、みんな ESD の輪を！」の講演と、世界寺子屋運動への協力者に感謝状授与、青年部活動報告、交流懇談というプログラムで開催しました。

パートナーシップで推進する市民参加型活動

● 未来に伝えたい文化遺産・自然遺産の保全 「ユネスコカレッジ講座」

ユネスコ婦人大学講座、仙台ユネスコ大学講座、ユネスコカレッジと継続実施してきた市民講座。世界遺産・地域遺産の保全継承活動の一環として、座学と実地踏査を組み合わせた講座を実施しています。最近では「奈良・平安時代に学ぶ」「地域遺産の貞山運河を学ぶ」シリーズを開講、東日本大震災以降は、災害の歴史や防災の視点での学びも組み入れています。



塩竈市籬（曲木）島にて記念撮影

● 未来を担う青少年の育成支援

「絵で伝えよう！私の町のたからもの」絵画展

未来を担う人材育成を、地域愛を育む地域遺産保全活動の視点で実施しています。「世界遺産・地域遺産」への関心を高め、自分たちの住む町、生きる場所を大切にしようという精神を育むために、小中学生を対象に実施している絵画展。毎年250～300点の力作が集まります。仙台市の中心部で開催される作品展には、多くの市民が訪れます。2019年度で22回の開催となりました。



絵画展表彰式。知事賞・仙台市長賞・富谷市長賞・ユネスコ協会会長賞など多くの賞が子どもたちを励まします

● 持続可能な地球環境を考える学び合いと行動

「ユネスコカレッジ ESD 講座」「世界平和と防災プロジェクト」

ESD を、SDGs の達成に貢献するものとして、さらに推進します。仙台ユネスコ協会は地域 ESD 拠点に登録しており、地域や社会の課題解決に関する学びの提供や、活動に取り組む様々な団体をパートナーとして支援していきます。2018年度から市民対象 ESD 講座を、東北地方 ESD 活動支援センターと共催で開催しており、2018年度は「気候変動」をテーマに、キリバスのケンタロ・オノ氏の講演と気象台の専門家による地球温暖化の説明、2019年度は「フードロス」をテーマに、宮城大学の作田竜一教授の講演、尚絅学院大学の渡邊千恵子教授のワークショップを開催しました。両講座共、行政や学校、専門家による多様な学びを提供、参加者に行動のきっかけを考えていただく構成にしています。2019年度はエスパル仙台に協賛いただき、「被災地から未来につなぐ SDGs」をサブテーマに「世界平和と防災プロジェクト」を開催、市民への SDGs の啓発と市民意識調査を実施しました。



世界平和と防災プロジェクトクロージング。故バチャウリ博士からのビデオメッセージと共に

青年部の活動

● 宮城ユネスコ子どもキャンプ

青年部が特に大事にしている活動で、年々参加希望が増加している人気のイベントとなっています。県内の小学4年生から中学3年生までを対象とし、子どもたちが自然の中でのキャンプを通して、自主性、コミュニケーション力、社会性などを身につけていけるようにテーマを設定し、プログラムに工夫を凝らしています。ユネスコの精神や活動を体験的に学ぶ内容に加え、2019年度からは SDGs を意識したプログラムを取り入れています。



総勢100名での2泊3日。オーエンス泉岳自然ふれあい館前で別れを惜しみ記念撮影

● スタディツアー

旅を通して「学ぶ」ことを目的に、青年部では、2019年度から新規事業として大学生主体のスタディツアーを企画しました。問題意識をもって、場所や目的、活動内容を自分たちで決め作り上げます。記念すべき最初のツアーは沖縄でした。地域伝統文化の継承に取り組む高校生の活動や、戦争を伝える語り部の方々との交流から、多くの学びを得てきました。さらに、自分たちの学びを次世代に伝える活動も行っています。



沖縄平和記念公園 平和の塔を背に

東北学院中学校・高等学校

〒983-8565 宮城県仙台市宮城野区小鶴字高野123-1



ESDとキャリア学習を通して、主体的、創造的、協働的に課題に取り組む力を育み、加えて、未来を展望して自らの使命を考える総合的な学習の時間「3L希望学」

2017年から総合的な学習の時間をリニューアルし「3L希望学」としてESDに取り組んでいます。宮城教育大学の小金澤孝昭先生(現名誉教授)に6年間の探究のフィールドを自分に身近な世界から地球・世界へと広がる形でデザインしていただき、SDGsを切り口にしながら探究学習を行っています。時を同じくして導入したPCの一人1台環境を用いて、学習の内容はポートフォリオとして蓄積し、都度振り返りながら6年(高校からの入学生は3年)を掛けて内容を深め、社会課題の克服とそのための方針選択とを明確に結びつけられるように工夫しています。

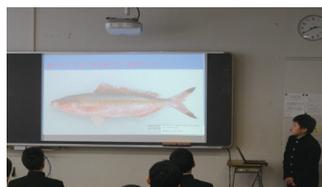


中学生の学び

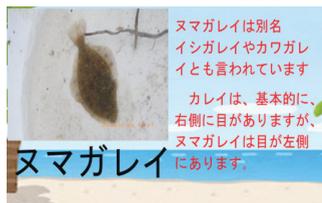
中学校1年生では、学校近くを流れる梅田川のフィールドワークから学びをスタートします。グループで事前に水質・生物・ゴミの様子について予測を立て、実際の様子と比較し、なぜそうなのかを考えてスライドにまとめて発表します。また、ゲストティーチャーをお招きして、微生物が水質浄化に果たす役割や日本の河川の特徴などについてお話をいただきます。学年の半ばには岩手で実施するキャンプに向けて、寒冷地で育つ作物や植物について事前学習を行います。そして岩手大学のご協力でするフィールドワークでの学びの内容と比較し、気づきをグループの仲間とスライドにまとめて発表します。学年の最後には今度は個人で、SDGsの13、14、15のゴールの達成のために頑張っておられる方を探し、その方の活動をスライドを作成して紹介します。学年の学習のまとめとして、ゲストティーチャーから講演を頂戴し、自分たちが取り組むべき事柄を考えます。

2年生は、「児童労働」の現状について、グループで調べて原因を探ります。同時に、「子どもの権利条約」についての理解も深め、自分たちと同年代の仲間や年下の後輩たちが働かざるを得ない現状についての理解を踏まえ、どうすれば現状を変えられるかを考えて提案し、全体で共有します。その後、海外でストリーチドレンの支援にあたった経験のあるゲストティーチャーからフィードバックをいただき学びを深めます。学年の半ばには「職場体験」を通して、事業所の方がどのような社会課題と向き合っておられるかを体感し、加えて「働きがい」を伺うことを通して「児童労働」の現状と結びつけて学びを深めます。その後、各事業所での学びをスライドにまとめて、発表会を通して学年全体でシェアします。学年の後半には、東京でSDGsの達成に取り組んでおられる方から学ぶ研修を行います。学びを結びます。

3年生は、12月に実施する「シンガポール研修」の事前学習で、異文化理解や持続可能な社会づくりに関する学びを積み上げていきます。一方で、自らの興味関心とSDGsとを結びつけてテーマを設定し、考えを論文にまとめる「卒業研究」に取り組みます。内容をスライドにまとめて直して、クラスで発表し、すぐれた内容のものは学年と後輩たちに向けて発表し、共有します。3年間の学びを通して自分らしさと社会課題の解決を結びつける視座を身に着けられるように支援します。



中1「すぐれた取り組みをされておられる方に学ぶ」



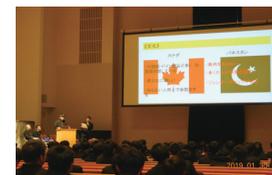
河川調査の発表スライドの一部

高校生の学び

高校1年生では、学年のスタートに「学び方学習」を柱とする2泊3日のオリエンテーション合宿を行っています。プログラムの1つとして、コースを超えて編成したグループで社会課題解決のプランを考え、提案・発表する時間を取っています。(2019年度は宮城大学の入試で出題された「移動販売車の活用プラン」に取り組みました。)その後、市販のワークブックを活用したキャリア学習とともに、SDGsを切り口とした「国際理解学習」にグループで取り組みます。学年を17のグループに分けて、さらにその中を小グループに分け、①ゴール達成への取り組みがうまく行っている地域とうまく行っていない地域を比較して原因を分析、②ゴールの達成に熱心に取り組んでいる企業を探して取り組みの内容を紹介、③自分たちで仮想の企業を立ち上げ、事業内容を考え、という学びに取り組みます。小グループごとに発表を行い、代表は全体の前で発表を行い学年で学びを共有します。また、留学生をお招きして内容に対してアドバイスを頂戴します。希望者を対象の交流会でさらに学びを深めて結びます。

2年生は、書籍、資料、論文、動画を活用して第二次世界大戦と原爆の投下、仙台空襲に関する学びを通して「平和学習」に取り組みます。学んだ内容を12月の「研修旅行」時に、被爆者の方から頂戴する講話やボランティアの方との被爆遺構巡りの中で深めていきます。研修の最後にはグループごとに、留学生の方のお力をお借りして英語でディスカッションし「平和な社会を築くにはどうしたらよいか」に関する提案をまとめて発表し、全体で共有します。一方で、市販の冊子を活用してキャリア学習を進め、年度の後には上級学校への「志望理由書」を作成する形で、ESDの学びを結びます。

3年生は、前年度末に作成を始めた「志望理由書」の内容を、仲間との協働学習、ゲストからの講演やフィードバック、各自が参加する講演会や研修の機会を活用して磨いていきます。生徒の主な進路は大学への進学となりますが、偏差値や世間的な評価を超えて、向き合いたい社会課題の解決のために最も相応しい選択となり、将来持続可能な社会の創り手となるように学校として支援しています。



「国際理解学習」の全体発表の様子



原爆投下時の平和学習

スタディーツアーでの学び

高校3年生を除く各学年で宿泊を伴う行事の学びの柱の1つをESDにしています。中学校1年生で10月に岩手で実施する「キャンプ」では、岩手大学のご協力をいただき寒冷地フィールドワークと平泉での世界文化遺産学習を行います。

中学校2年生で2月東京で実施する「研修旅行」では、SDGsの達成に取り組む省庁や企業での研修を行います。また、留学生との方との交流の機会を通して異文化理解の機会を持ちます。

中学校3年生で12月にシンガポールで実施する「修学旅行」では、ニューウォータービジターセンターなどで資源を通して持続可能な社会について考える機会を持ち、また現地の日本企業で働く方やシンガポール国立大学の学生との交流を通して異文化について考える機会を持ちます。

高校1年生で4月に福島で行う「オリエンテーション合宿」では、ESDと協働学習についてグループワークを通して理解を深めます。

高校2年生で12月に広島と関西で実施する「研修旅行」では、宮島での世界文化遺産学習、広島での平和学習、神戸・大阪でのESD学習を実施します。特に3日目のフィールドワークは、ユネスコスクール東北コンソーシアムに力添えをいただき、RCE兵庫・神戸のご支援を頂戴し20ほどのコースに分かれてフィールドワークを行い、リフレクションを通して学びの内容を共有しています。加えて、「いのち」を核とする兵庫のESDと比較することで本校のESDについて、また一人ひとりに進路に関して深く考える大変に有意義な学びの機会となっています。



RCE兵庫・神戸の支援による全体リフレクション



フィールドワークの様子

福島県立安達高等学校

〒964-0904
TEL:0243-22-0016
<https://adachi-h.fcs.ed.jp/>



ユネスコスクール概要

本校では東日本大震災後、2012年度に福島の現状を踏まえて「復興教育」を開始した。また「ESD（持続可能な開発のための教育）」を教育活動の中心にして取り組み、その成果が認められ2012年12月に福島県の高等学校で初となるユネスコスクールの承認を受けた。

教育目標は「これからの社会をよりよく生きる人材の育成」である。「基礎知識・経験の充実（学校の授業）」と「解のない問いへの希求（ESD）」の両輪により目標達成を図る。現在は「SDGs：Sustainable Development Goals」を具体的指針として探究活動に取り組んでいる。

3年間の主な流れは次のようになる。1年次：国際理解を中心とした様々な活動を通してESD/SDGsについて考察し、ポスターセッションを行う。2年次：1年間の活動を踏まえた発表を全校生対象に実施。3年次：それまでの経験を生かし、自らの進路実現を図る。

国際理解教育

本校ではOECD東北スクールやユネスコスクール世界大会への参加を経験し、国際理解活動を充実させたいという気運が高まった。それから以下のような活動を実施し、生徒の資質向上に寄与している。

例年7月にアメリカのダートマス大学生が来校し、生徒と交流活動を続けている。また2015年度から夏期海外語学研修in オーストラリアを開始。震災後における復興の取り組みや現状を現地の方々へ報告している。さらにJICA二本松との連携事業でグローバルキャンプや出前講座の実施。福島県在住でルワンダ出身の永遠璃マリルイズさんによる講演会を毎年開催している。卒業生の中には、将来青年海外協力隊へ入隊し途上で活躍したいと語る生徒もいる。



海外研修の様子



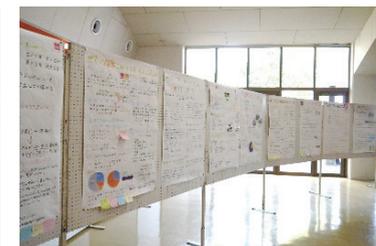
ダートマス大学生との交流

公開ESD発表会

本校ではそれぞれのグループが選択したテーマを探究し発表する、全校生徒参加の公開ESD発表会を実施している。午前中は2年生各クラスで選出されたグループによる発表、午後は海外研修班や有志団体が発表を行う。年によりテーマが異なり、震災以降における福島県の高校生の興味関心の変遷がわかる。震災後のテーマは風評被害や再生可能エネルギーなどが多かったが、現在ではLGBTや介護問題、児童虐待から水資源まで多岐にわたる。同時にポスターによる活動内容の発表も行っている。



発表会の様子



ポスター展示

学校・地域事業者との連携、その他の活動

復興教育と連動し、国内外の学校との交流を実施している。諸例として、兵庫県立北須磨高等学校と飯館村など被災地視察、検討会。また京都教育大学附属中学校との連携事業、そして全国中高生サミットにて共に議論し、合同で福島避難区域視察を行った。福島県立ふたば未来学園高校のJICAグローバルキャンプ宿泊研修に参加し、国際理解に関する各分野のエキスパートからの講義を受けた。

2015、16年度 ACCU主催の「国際協働学習プロジェクト」に応募し、各国の『食』について海外の学校と協働学習を行った。その学習の調査探究を通して、二本松市役所をはじめ、醸造店国田屋醸造、ななくさ農園、JAみちのく安達など、地元自治体や事業者とのつながりを深めることができた。つながりは現在も継続しており、学校教育への一助となっている。



交流の様子



福島米について調査中

会津ユネスコ協会

〒965-0871 福島県会津若松市栄町3-50
会津若松市教育委員会生涯総合学習センター(会津稽古堂)内
TEL:0242-22-4700



会津から世界の平和と 人々の幸せを願う ESD

会津ユネスコ協会は、1980年11月18日地元有志によって設立されました。現在会員は法人を含め94名。設立以来、世界中の人々が平和で幸福であることを願いながら、ユネスコ憲章の浸透を図るべく、持続可能で誰一人取り残されない持続可能な社会実現のため、会津全域を活動基盤にして活動を進めています。

活動域内では、ユネスコスクールが小中学校で6校（小学校5校、中学校1校）が誕生しています。現在、会津若松市内の中高一貫校が申請中です。少しずつつながりを見せています。

主な活動として、ユネスコスクールへの継続的な支援をはじめ、幼稚園・保育園や認定こども園などを対象とした幼児画展や小学校対象のユネスコ作文コンクールの実施、地域公民館や教育機関と連携を図りながらの書き損じはがき回収活動を継続的に行い、人材育成に力をいれています。さらに、会津地域の伝統文化の保存を目的に、地域文化功労者表彰制度を発足させ、地域文化遺産の継承・保存活動を進めています。



定期総会

世界に響け「平和の鐘」

会津ユネスコ協会では、「人の心の中に平和のよりでを築かなければいけない」をスローガンに、積極的にESDを推進しています。毎年7月下旬、会津若松鶴ヶ城にある鐘撞堂で、「平和の鐘を鳴らそう」運動を行い、世界と未来世代に対して、存在意義の強くアピールすると共により一層の協力・支援を呼びかけています。主に、鶴ヶ城を訪れた観光客の皆さんに呼びかけて協力していただきながら、鐘を鳴らします。

この鐘は、戊辰戦争の時も、西軍に攻撃されながらも鐘守が交代で時を告げたといわれている鐘で、荘厳な響きに圧倒されます。外国からの観光客も参加者されることも多く、SDGs16の目標にも合致する国際色豊かな活動になっています。



鐘撞き堂全景



鐘撞き体験



活動協力会員

育てよう豊かな感性と広げよう支え合いの心

会津ユネスコ協会主催の幼児画展と作文コンクールやユネスコ教室、全国一斉に実施される書き損じはがき回収キャンペーン活動には、地元会津の幼児や児童達が進んで参加しており、未来を担う人材の育成に寄与しています。描かれた絵画には、子ども達の豊かな感性が光っており、参加幼児の励みになり、保護者の方にとっても大きな喜びであり、一般市民の方にも好評で、絵画鑑賞を楽しんでいただいています。

国連機関であるユネスコの役割を学ぶユネスコ教室は、校長会の協力を頂き、今年度から、北会津地区内の小中学校を年3校ずつ実施することになりました。ユネスコ会員が講師となり、ユネスコの活動を伝えています。ユネスコ教室実施校の児童を対象に、作文コンクールを実施しています。ユネスコ教室を行うと、児童がユネスコの活動を身近なものとしてとらえることができるようになり、実施することに大きな意義を感じています。

書き損じはがき回収キャンペーン活動には、北会津地区内小中学校や只見町小中学校、近隣の町内小学校と依頼範囲を広げながら、書き損じはがきの回収を進めるほか、市内の公民館にも回収ボックスを設置して、一般市民にも協力を呼びかけています。この活動は、はがき1枚からできる国際貢献活動であり、児童・生徒の皆さんが世界に目を向け、世界特に東アジアの国々の非識字者が7億5千万人もいるという現実を考える絶好の機会になっています。



会津ユネスコ協会主催 幼児画展



ユネスコ教室

地域文化の保存・継承 みんなで伝えよう・続けよう

会津ユネスコ協会では、地域に残された文化遺産を後世に伝え、地域文化の発展・継承に寄与するため、「地域文化功労者表彰」を2004年に創設しました。これまでに、会津美里町雀林「へびの御年始」や只見町の小林早乙女保存会「早乙女踊り」、柳津の「神楽」等、14件を表彰しています。表彰団体からは、喜びの声が寄せられ、担い手不足に悩まされている地域の方にとっては、保存・継承活動への大きな励みになっています。会津地域内には、2016年日本遺産に認定された会津三十三観音めぐりや2019年日本天文遺産に指定された日新館天文遺産等もあり、今後、この貴重な遺産をどのように周知保存活動を進めていけばいいのか課題も残されています。



会津美里町「へびの御年始」



小林保存会「早乙女踊り」



柳津町「神楽」

宮城県多賀城高等学校

〒985-0831 宮城県多賀城市笠神二丁目17番1号
 TEL:022-366-1225 FAX:022-366-1226
 E-mail: tagajo-hs@od.myswan.ed.jp
 https://tagajo-hs.myswan.ed.jp/



創立記念行事「ESD 学習発表会」

令和元年10月15日に本校体育館において、「ESD 学習発表会」が行われました。宮城教育大学国際理解教育研究センターでESDの研究を行っている市瀬智紀先生と、学校評議員の渡辺博信様をお迎えし、本校生徒が前期に取り組んだESD学習発表を行いました。



①「世界津波の日」高校生サミット in 北海道

世界各国の高校生と津波の脅威と対策について学ぶため、活動発表、意見交換、交流をしました。

②全国防災ジュニアリーダー育成合宿 東北

8月に多賀城高校、国立花山青少年自然の家、栗駒山麓ジオパークセンターの施設を利用して行われた活動に参加しました。北海道から熊本までの全国の中学生・高校生が集まり、防災や減災の各校の取り組みや今後の課題について考えました。

③他県高校交流

防災系学科のある舞子高校を中心とする兵庫県の高校生や、南海トラフ地震への対策として防災教育を推進している高知県の高校生が本校を訪れ、多賀城市内まち歩きやワークショップを行いました。

④鶴ヶ谷復興住宅ボランティア

ボランティア同好会は、PBL型ボランティア（課題を持ってボランティアに取り組む活動）として以前より鶴ヶ谷復興住宅での様々なボランティアをしてきました。今年は、その中で住民夏祭りのボランティアとして参加してきました。

⑤SSH指定校との合同実習（北海道室蘭栄高校・北海道釧路湖陵高校）

- ・災害科学科1、2年の有志が北海道室蘭栄高校と、洞爺湖・有珠山での合同巡検や室蘭工科大学での実験を行いました。
- ・災害科学科1年生の有志が、釧路湖陵高校と釧路湿原における合同巡検や野生生物保護センターでの講義を受けました。

⑥SSH生徒研究発表会

災害科学科3年の4名がSSH校の全国発表会（神戸）に参加し、「都市型津波の危険予測」と題した研究発表を行いました。

⑦スキルアップ研修Ⅰ「つくば研修」・スキルアップ研修Ⅱ「関東研修」

- ・災害科学科1年生が、茨城県つくば市の宇宙航空研究開発機構 JAXA や防災科学技術研究所 NIED、地質標本館などを訪問し、防災・減災に関する実習を行いました。
- ・災害科学科2年生が、神奈川県横須賀市の海洋研究開発機構 JAMSTEC や港湾空港技術研究所 PARI を訪問し、先端科学に触れると共に、横浜市における横浜まち歩き「関東大震災を歩く～山手・山下コース～」において防災学習を行いました。

東日本大震災メモリアル day 2019



【目的】

将来の宮城を支え、自主防災組織等における次世代のリーダーなど将来の地域の防災活動の担い手を育成するため、防災に関する知識・技術を習得し、防災や減災への取り組みに自発的に協力、活動する高校生をみやぎ防災ジュニアリーダーとして養成することを目的としています。また、全国の高校生が、東日本大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の減災に貢献するため、自らの課題研究などの成果を発表するとともに、ワークショップなどを通して意見交換を行いました。



おわりに（未入稿）